宮崎大学教育学部紀要　人文科学　第59号（1986）45—52頁

日本人学生の英語発音上の問題点への一考察(1)

南　　太一郎

Persistent Mistakes of English Pronunciation Made by the Japanese Student(1)

Taichiro Minami

1. はじめに

1．1．前回の論文[1]においては，中学校での英語教育に関して，特に音声面の運用能力として，どの様な基本的で最少限度の要素が考えられるかを音韻論的に考察した。今回はそれを下敷きにしつつも，より音声学的に日本人英語学習者（特に主として将来英語教員となるべく英語を専攻している者，あるいはそれに準ずる者）が繰り返し犯す代表的な発音上の誤りを，主として分節音（segmentals）のレベルで確認し，どこに指導のポイントを置けば良いかを考察しようとするものである[2]。

1．2．60年度2年次生向けの専門科目において，Peter Roach 著，*English Phonetics and Phonology*（Cambridge Univ Press, 1983）をテキストに使用し，受講生（英語科4名，;小学課程で英語の副免希望者2名）に対して毎週テキスト exercise の指定個所をテープに録音して提出させ，それを指導教官（現筆者）が聴いてチェックした。授業手順としては，学生は週2回のクラスのうち，1回目はテキストの内容に関する音声学的概念修得を主眼として指導され，2回目には当該学習ユニットのテキスト付属テープ録音の実際的発音訓練と矯正を主眼として指導された。この場合，発音訓練と矯正は主として当該ユニットの音声事項に最重点を置くが，それにとどまらず，各母音，子音中既習のものについての誤りは，個々の学生にその都度指摘し，矯正がなされた。次に，その次の週の1回目の授業時に前回分の指定された録音個所のテープを提出させ，それを毎回各個人について発音チェックし，次回に本人にその結果を報告した。テープのチェックは，1人に対して最低2～3度行ない，チェックもれ，聴きまちがいのない様注意した。又発音の不明瞭な部分については納得出来るまで聴き込んで正確を期した。

その様にして前期中に各母音，子音から始めて語強勢と弱母音 schwa まで訓練，矯正を終えた。チェック事項に関しても，当該ユニットで取り扱われている音声事項はもちろんのこと，その他の事項についても問題だと思われるものはすべてチェックした。

このプロセスを経て，ユニットが進むにつれて発音は次第に良くなり，誤りも数的には減少したが，それにもかかわらず，繰り返して犯される誤りがやはり厳として存在した。以下はそれらの報告，考察であるが，今回は経時的な誤りの減少という発音修得の段階的過程については触れず，繰り返し表われる誤りにはどういうものがあるか，そしてそれはどういう点で問題なのか，という様な点に注目して考察することにする。

2. 母 音 (Vowels)

母音の記述，分類に関しては理論的枠組みの違いにより英・米で差がみられるが，以下 Roach のテキストにより，原則として伝統的イギリス音声学の記述，分類法に従う（純理論的考察が今回の目的ではないので，理論的厳密性は問題としない）。ただし，母音の音質に関して英・米で違いの大きいもの（英音の［ɒ, ɜ:, əʊ］など）については，顕著な英音に固執せず，日本でより一般的な米音に置き換えて訓練をしたので，それを基に考察する。

2. 1. 短母音 (Short Vowels)

短母音とされるものは以下の通り。

［ɪ, e, æ, ʌ, ɒ(ɑ),[3] ʊ］

その内，繰り返し問題となった音は次の通り。

1）［ɪ］

後述の，開口度の一層狭い長母音［i:］に近く，日本語の［イ］の様に緊張を伴って発音される。（例—bit, tin, fill, lift）[4]

2）［æ］

今回の結果では短母音中最も誤りの頻度が高く，後々まで繰り返されるもの。日本語の［ア］（や時として［エ］）の様に発音される。（例—ham, sat, pack, rack,）

3）［ʊ］

1）の［ɪ］と平行した現象として，後述の開口度の一層狭い長母音［u:］に近く，円唇化した日本語の［ウ］の様に緊張を伴って発音される。（例—look, could, put, shook）

2. 2. 短母音比較 (Short Vowels Contrasted)

二項対立的な minimal pair で見た場合，［ɪ—e］を除いた以下のものの誤りの頻度が高い。

1）［e—æ］

［æ］の開口度が少なく，狭く発音されて［e］との対立があいまいになる。

（例—hem—ham, set—sat）

2）［æ—ʌ］

両者共に日本語の［ア］に近い音質を持っているので，特に［æ］が正確に調音されない場合，［ʌ］とまぎらわしい発音になる。（例—lack—luck, bad—bud）

3）［ʌ—ɒ(ɑ)］

特に［ɒ］が米音［ɑ］として円唇化の少ない広母音で発音される場合，［ʌ］の開口度が許容範囲より広くなって発音されると両者の音質差があいまいになる。因みに，この二音の対立が minimal pair においては最も誤りの頻度が高い。（例—dug—dog, cup—cop）

4）［ɒ(ɑ)—ʊ］

単音としては［u(:)］に近く発音され勝ちな［ʊ］が，対立ペアにおいては意識されすぎる為か緊張がなくなり過ぎて［ɒ(ɑ)］とまぎらわしくなる。

（例—lock—look, cod—could）

以上4つの場合の内，音識別 (sound discrimination) の観点からすると，結局最も問題になってくるのは，日本語においては［ア］という1音で用が足せるものが，英語においては［æ, ʌ, ɒ(ɑ)］という3つの音にまたがっている，ということである。そして，その中でも［æ］は特に，正確に調音される為には，日本語の［ア］を基準に考えると，最もその調音プロセスが複雑で

ある為，聴取時の対比は出来やすくても，発音時にはむずかしくなるものと考えられる。

2．3．長母音 (Long Vowels)

長母音とされるものは次の通り。

［i:，ɑ:(r)，ɔ:(r)，u:，ɜ:(ɝ:)］

その内，特に問題となる音は次の通り。

1）［i:］

短母音［ɪ］と比較して緊張を伴った音であるということが意識されずに発音された瞬間に日本語の［イ］や［エ］に近い，英語音の［i:］としては緊張の少ない音になってしまう。習得困難な音ではないが，習慣化する必要がある。(例—fee，bead，me，steed)

2）［ɑ:(r)］

この音の誤りには主として以下の3通りがある。

a）［ɔ:(r)］の様に発音される。(例—part，lark，large，carpet)

今回の例は，特に［ɑ:］の後ろに米音特有のr－coloring を付ける際に［r］の影響で前の母音［ɑ:］が円唇化され，誤って発音されたものと考えられる。

b）［ɜ:r(ɝ:)］の様に発音される。(例—bodyguard，park，spark)

この場合も米音のr－coloring 発音の際の誤りと思われる。[5]

c）［ɑ:］の音長が短すぎる。(例—carpeted)

この音が短く発音されると，音声脈絡によっては米音の開口度の広い短母音［ɑ］とまぎらしくなる場合がある。

3）［ɔ:(r)］

この音の誤りには主として以下の2通りがある。

a）［oʊ］の様に二重母音化する。(例—roaring，support)

特に roaring の場合は，語頭の［r］が円唇を伴うことに引きずられて，長母音［ɔ:］がそれと比べて開口度の小さい［o］から始まり，さらに後続者が［r］であることから調音が固定しないことに原因すると思われる。

b）［ɑ:］にやや近い，開口度の大きな［ɔ:］のvariant として発音される。

(例—corn，cord，record，short)

日本語の［オ］とは違う音であるということが話者に意識されすぎ，［ɔ:］に円唇化が伴うことが忘れられて表われた誤りと思われる。

4）［u:］

共通日本語 (common Japanese) の［ウ］は円唇化のない音として記述される（［ɯ］）が，又方言音としては円唇化を伴った［u］という音も存在する。しかしながら，英語の［u:］はそれ以上に強い円唇化を伴なうことが普通で，それを意識しなかったり忘れたりした場合，円唇度の小さい不十分な音になってしまう。(例—zoo，lose)

尚，日本人にとって非常にむずかしい音とされる［ɜ:(ɝ:)］の音は，他の音との対比でなくそれ自体として表われる場合，今回に限ってはそれ程の問題にはならなかった。ただ2例 (err，workaday) において，開口度の広い日本語の［ア］に類する音で発音されたものがあった[6]ことからすると，たまたまテープ録音時に意識して正確に調音された可能性もあるが，それにしても一度ある程度修得されれば意識的に発音出来るようになることを示しているのかもしれない。

2．4．長・短母音比較 (Long-short Vowel Contrasts)

これに関しては，Roach は次の様なペアを対照させている。

［iː — ɪ］，［ɑː — ʌ］，［ɒː — æ］，［ɔː — ɒ（ɑ）］，
［uː — ʊ］，［ɜː(ɜ̈ː) — ʌ］，［ɑː— ɒ(ɑ)］

これらペアの母音を発音する際に問題となるのは，1）2音が別々の音として識別されているかどうかということ，それに加えて，2）一応2音は別なものとして発音されているが，個々の音として十分正確な調音がされているかどうか，という2項である。今回の結果から見ると，1）は余り問題ではないと思われる。（つまり，例えば［iː— ɪ］において，［ɪ］自体の音質は狭い［i］に近く発音されていても，［iː］と比べれば長さによって区別されている様な場合，厳密に言えば問題であるが，伝達（communication）の観点から見れば許容され得るであろう。）したがって，1）で問題となるものとしては，［ɔː — ɒ（ɑ）］および［ɑː — ɒ（ɑ）］ということになろう。

［ɔː — ɒ（ɑ）］については，stork — stock，short — shot などで［ɔː］の開口度が広くなり，［ɑ］に近く，加えて［ɒ］が米音寄りの［ɑ］として発音されて違いがあいまいになっている。

［ɑː — ɒ（ɑ）］に関しては，part — pot，lark — lock などで［ɑː］が米音の r — coloring の音として発音され，［ɔː r］に近くなり，まぎらわしくなっている。minimal pair contrast においては，上記 2）ともかかわってくるが，個々音の調音が正確でないともう一方の音に引きずられて区別があいまいになる，という傾向が見られる。

そこで，結局問題は2），つまり，2音は一応別なものとして発音されてはいるが，個々の音としても十分正確に調音されているかどうか，ということにかかってくると思われる。minimal pair contrast において発音の誤りと判断される単一音としては，次の様なものがあげられる。頻度順に示せば，［æ, ʌ, ɑː, ʊ］（6名中3名の発音に問題あり），［ɔː］（2名），［ɪ，ɒ（ɑ），ɜː(ɜ̈ː)，uː］（1名）となる。

以上のことから，厳密に音声学的に考えれば，長母音であれ短母音であれ，個々の音を正確に発音出来ることが改めて重要である，と結論されよう。

2．5．二重母音 (Diphthongs)

二重母音としては次のものがある。

［eɪ，aɪ，ɔɪ，əʊ（oʊ），aʊ，ɪə(r)，eə(r)，ʊə(r)］

以上の内特に問題があると思われるものは，頻度順に言えば，［əʊ(oʊ)］；［ɔɪ］；［ɪə(r)，eə(r)］である。

1）［əʊ(oʊ)］

実際の指導に当たっては，既述の様に英音の［əʊ］よりは，日本人にとってより実際的と思われる米音［oʊ］として扱ったが，誤りには以下の2通りが見られる。

a）長母音［ɔː］の様に発音される。（例—stone，open，only）
二重母音であるという意識が欠けている場合である。

b）第一要素［o］が，実際よりは開口度の大きい［ɑ］寄りの音に発音される。
（例—oppose，open，alone）
第二要素の円唇化を伴っている狭母音［ʊ］への渉り（glide）が正確に出来ていない場合である。

2）［ɔɪ］

この二重母音の第一要素［ɔ］は，長母音［ɔː］と記号は同一であるが，狭母音［ɪ］へ glide する為，実際には［ɔː］より開口度が少ないと考えられるが，［ɔː］からの誤った類

推による為か，やや開口度が大きすぎる発音になる。(例—coin，boil)

3）［ɪə(r)，eə(r)］

いずれの場合も第一要素が緊張を伴って必要以上に狭く発音される。

(例—fear，beard，fare，pair)

3. 子 音 (Consonants)

子音に関しては，英・米で音価にも記述分類法にも大差はない。そして，すべての子音が日本人にとって問題になる訳でもない。以下特に問題と思われる音のみ取り扱う。

3．1．破裂〔閉鎖〕音 (Plosives〔Stops〕)

破裂音に関して最も問題になるのは，語頭，音節頭 (initial position) で／p，t，k／に気息 (aspiration) が伴うという現象（つまり［p^h，t^h，k^h］となる）がうまくとらえられていない点である。これは英語発音の場合の呼気量と呼気の使い方ということと不可分であり，日本語において，普通には英語の場合ほど呼気を有効に使用しないことに原因する。英語においては，破裂音には3つの主な異音が相補的に存在するという認識（例えば／p／に［p^h，p，$p^{\text{˺}}$］の3異音がある）が必要である。語頭，音節頭では必ず［p^h］が生ずる。

(例—topic，pocket，cart，depend)

今回の結果で一つ興味深かった点は，破裂音練習の2つの exercise で，一方には発音記号に stress mark（音節頭につける）表示がなく，他方にはそれがあり，stress mark が印されている exercise では全員が aspiration を正確に発音している事実である。このことから，破裂音と aspiration の関係を体得させるには，stress がどの音節に落ちるのかということを繰り返し学習者に意識させることが大切である，ということが改めて理解される。

3．2．摩擦音 (Fricatives)

摩擦音の場合は，各々の調音点と調音法を最初にしっかりと指導することによって，かなり良い成果が得られる（例えば，日本人が不得手だとされる［θ，ð］などは，舌先と上歯裏との間の摩擦が本質で，舌を両歯の間にはさんだり，両歯で噛んだりすることは必ずしも必要ではない，ということを事あるごとに指摘し，意識させることによってかなり誤りが矯正される）。しかし，なおかつ後々まで持続する誤りとしては次の様なものがある。

1）［f］

語頭，音節頭に表われる場合に，圧倒的に摩擦力と持続時間が少ない。

(例—fast，foil，fall，offer)

2）［z］

日本語のザ行音は，音韻的には／za，zi，zu，ze，zo／と表記されるが，実際の音声としては［dza，dʒi，dzɯ，dze，dzo］であり，［dʒi］を除いては［dz-］とつまる破擦音的な音である。この現象が無意識の内に英語を発音する場合にも持ち込まれるのか，［z］が継続者 (continuant) とならず，つまって発音される。(例—lazy，lose，shoes，resurrect)

3）［ʃ／ʒ］

いずれも日本語の［シ，ジ］よりは円唇化を伴って発音されるという点が，特に［ʃ］の場合後ろに［iː，ɪ］という平唇 (spread) 狭母音が続く場合に日本語［シ］の様になってしまって忘れられ，誤った発音になる。(例—sheet，leashes，washing)

又，［ʒ］は日本人には不得手な音で，特に［dʒ］（後述）との対比練習において，1）［ʃ］

に近く弱すぎる発音になったり，2）［dʒ］と同様強くつまって破擦音的発音になったりする。（例—leisure, lesion）

3．3．破擦音（Affricates）

英語において破擦音として独立の類を形成するものとしては［tʃ，dʒ］がある。これらの問題点は，1）上述の［ʃ，ʒ］同様日本語［チ，ヂ］（［ヂ］は現代日本語においては［ジ］との区別が薄れてきてはいるが）の習慣を持ち込むことにより，円唇化が不十分であること（例—cheat），及び，2）特に［tʃ］が語末，音節末（final position）に来る場合，［tʃi̥］の様に無声化母音を伴って発音されること（例—match, catch）である。

3．4．その他の子音

1）［-n］^{E} vs. ［-N］^{J}

英語の［n］は常に舌先と歯茎との閉鎖を伴う鼻音（nasal）であるのに対し，日本語の［n］は語尾においては／ん／＝［N］となる。この発音が英語の［n］が語尾に表われる際に持ち込まれて，［jɔ:n］［wɪn］等が［jɔ:N］［wɪN］と発音されてしまう。

2）［ŋ—ŋg］

日本語において鼻濁音の習慣がない地方（宮崎も入る）の学生にとって，この両者を正確に区別することはむずかしく，特に［ŋ］の発音を誤りやすい。つまり［ŋ］であるべき場合に［ŋg］となってしまう誤りである。（例—singer, hanger, longing, thing）又，［ŋ］を意識し過ぎると，［ŋ—g］の対比において本来［g］である finger［ˈfɪŋgə(r)］などが［g］を落として誤って発音されることにもなる。

3．5．子音群（Consonant Clusters）

子音群で問題になるケースには大別して2通りあり，それらは，1）語頭子音群と，2）語末子音群である。音節の基本構造がCV（子音十母音）である日本語の影響を多く受けるのもこの clusters の場合である。

1）語頭子音群

a）子音群の間に母音が挿入される。（例—shrink［ʃɯrɪŋk］, breath［bɯreθ］）

b）plosive＋l／r

英語では，語頭，音節頭において［p，t，k］の破裂音に［l，r，w，j］のいずれかが後続する場合，それらは無声化されるが（この現象は3．1．で扱った aspiration の現象と平行関係にある），特に l，r が後続する場合に無声化が起こっていない例が多く見られる。（例—play［pl̥eɪ］, tray［tr̥eɪ］, clear［kl̥ɪər)］, pray［pr̥eɪ］), cry［kr̥aɪ］）

呼気のエネルギーは語頭，音節頭が最も大きいということを強調する必要があろう。

2）語末子音群

a）Final plosive-plus-plosive clusters

語末に2つの破裂音が続けて生じる場合，最初の破裂音は無音外破（inaudible explosion）となり，実際に破裂があるのは二番目の破裂音のみであるのに，その一番目のものが外破されてしまう誤り。[7]（例—thanked, effect, rigged, grabbed）

b）Other final consonant clusters

破裂音以外でも，語末に2～4個の子音が連続する場合に発音が不正確になるものがある。

i）[-tʃt, -dʒd] の連続において，間に母音が挿入されて，[-tʃit, -dʒid] の様に発音される。（㊀—reached, edged, ranged）[8]

ii）[-sks, -ksts] の連続において，いずれかの音が脱落（消失）する。
（㊀—risks, texts）

4. 語強勢と弱母音（Word Stress and Schwa）

Roach は，弱母音（unstressed vowel ; schwa [ə]）が音節間現象（intersyllabic phenomenon）としての語強勢と不可分の関係にあることから，他の母音と切り離して別項目として扱っている。ここで問題となるのは，この［ə］が明瞭な音質の日本語の［ア］あるいは，つづり字との関係で［オ］の様に発音され，弱くあいまいに発音されないことである。弱・強という強勢のメリハリと母音の音質との関係に，繰り返し注意を喚起する必要が大である。（㊀—melon［オ］になる ; Autumn, album, patrol［ア］になる）

5. おわりに

以上の事からして，かなり断片的かつ煩雑ではあるが，音声学的にどういう発音がどういう点で問題であるかは明らかに出来たと思う。ここで重要なことは，以上述べてきた発音の誤りがすべて同程度の誤りではなく，主ずと程度に大小，軽重があることである。例えば，短母音中，[ɪ, æ, ʊ] を取り上げたが，そのうち最も重大なものは［æ］であり，又長・短母音の対比では［æ—ʌ—ɑ（ɑ）］の系列が最も重大である。そして，［æ］の様にそれ自体の調音のむずかしいものもあるが，押し並べて言えることは，結局発音修得においては，学習者の中で「意識化」と「習慣化」が正しく行なわれることこそが肝心である，ということである。そして，その為には，例えば語頭，音節頭の破裂音と aspiration との関係や，破裂音連続における無音外破の現象の様に，単に個々の音をそれ自体正確に発音出来るだけでなく，理屈を通じてパターンとして現象を体得，修得する必要がある。そして，やや煩雑なそれらの音声的特徴を自分のものにしなければ，本当の意味で「英語らしい」発音には達しないのではあるまいか。単に伝達の為に曲りなりにも「通じる」だけで良しとするならば（確かにその段階で十分な人々がいることは認めるが），音韻・音素的レベルで留まってもよかろうが，[9] 教員志望の学生としては，音声的レベルにまで自分の発音を高め，維持していくことが肝要である。発音に意を用いず，マズイ発音を教室でタレ流す教師ほど自分の責任を将来に転嫁するものはなく，反面教師的役割すら演じられないのである。今後共この方面での指導徹底と教員志望学生の真摯な自己研鑽が求められる所以である。（続く）

注

1）拙論『外国語による伝達能力を育てるということについて—音声学的観点から—（英文）』（宮崎大学教育学部紀要，人文科学57，1985年3月）参照。

2）ただし，後述するように，限られた状況で限られた人数の者について考察した結果であるから，すぐさま定量的分析に基づく一般化は出来ない。が，それでも以下述べる事柄の中には，これまでるる指摘されている日本人の発音の誤りのひな型が数多く含まれていることから言って，発音指導上のポイントを再認識する程の意味はあろうと考える。

3）以下，発音記号のカッコ内の音は，特に明示しない場合には，典型的なアメリカ発音を表わすこととする。

4）以下，原則として今回学生が誤って発音した代表例を，つづり字により数例あげる。

5）［ɑ:］のみの発音は比較的容易に修得されることからすると，確かに米音特有の r－colring を伴った発音の指導はやっかいである。便ぎ的に［ɑ:r］と表記されているが，米音では実際には［ɑ:］を発音した後に［r］が発音されるというよりは，むしろ同時調音的に2つが発音されるので，表記としても［ɑɚ］とする方が正確である。したがって，聴いた時に r－coloring の方に注意が行きすぎると，［ɑ］の広母音性が聴き落とされ，［ɜ:r（ɚ:）］の様に誤って判断されて，それがそのまま発音時に re-produce されるものと思われる。

6）ただし，r－coloring のない英語の［ɜ:］は，音質が人により時として，日本語の［ア］に近いことがある為，必ずしも workaday を［ˈwa:kədeɪ］の様に発音することが常に誤りだとも断定出来ないであろう。

7）無音外破とは直接の関係はないが，［-gd］，［-bd］の場合に，直前の母音の音長が短かすぎると，無音外破は正確に出来ていても，［-kt］，［-pt］とまぎらわしくなる点にも注意が必要である。これは，後続子音が有声であるか無声であるかによって，直前の母音の長さが微妙に変わる，ということの裏返しの現象である。

8）語末ではなく語中の例であるが，［-dr-］においてやはり途中に母音が挿入されて，日本語の［ドレ］の様に発音された例もある。（例—hundred）

9）中学生がまず修得すべきであると思われる最低限度の音声・音韻的諸特徴については，注1）にあげた拙論参照。学生，生徒は初歩の段階から入り，一応最低限度のものを修得すべきであり，必ずしもすべての者が進んだレベルにまで達する必要はないかもしれないが，教える側に立つ者に要求されるレベルは又それとは主ずと異なるはずである。 A. C. Gimson, *An Introduction to the Pronunciation of English.*（3rd ed.：Edward Arnold, 1980, P. 304）参照。

（1985年9月17日　受理）